

一つの視角

(大阪) 中島龍太郎

世話役の一人として、昨年度の大会は予想以上にうまくいったと思っております。これは開催地が東京で参会者を得やすかったこと特に北海道・東北などから多数の参加をみたこと、いろいろな問題に対する発言が活発であったこと、司会者の御努力等によるところが大であります。第一日の研究発表は予定どおりに進みましたが、例年より発表者が多かつたため報告者に無理をさせたようでも、特に中野氏の大呑の漁村の報告などは、もっと時間をかけて充分論議を徹底させていたたく機会を持ちたいと思ひました。第二日のシムボジウムも初めての試みとしては先ず先ずで、特に東北地方の農村の型による生産構造の報告(我孫子氏)は個人的に教えられるところが大きかったです。両日の報告を通じて問題が多岐にわたったため、その全容は年報をまとなければなりません。議論の中心は生産構造と部族(支配)の構造なしに村落組織の

結び付きが、これを決定する要因として家族及び縁連合、兼業化と過剰労働力、土地所有と農業労働、農業経営の型と市場、技術との結びつき、農民意識と価値体系等が戦後の各地域を例にとつて説明されたといつてもよいでありましょう。これらの問題中特に第二日の討論を傍聴して感じたのは、最近の農村の変化において、兼業化乃至分業化の傾向が顕著にはあるが縁連合を骨子とする旧村落構造を要質とせ、行政権力の村落支配の再編成(町村合併と農協団体の改組等)に照して新たな意識をもつてきたのではないかという点であります。

兼業化乃至分業化については、昨年来度々年報論議として提議され、また共同体的論の一視点として指摘(山室周平氏)されたところでありましたが(昨年度研究通信参照)、第二日の討論でもこれに直接間接関係する発言が多かつたようです。特に兼業化の問題については、従来は農業労働力の農外転出の形態として、また農外所得の構造なしに兼業と他産業の結び付きにおいて述べて論じられ、シムボジウムの発言(風姿氏)でものべられたように、部族意識や村落共同体との関係では充分尽くされなかつたと思ひます。しかしこの種の問題がすでに幾度か論議の対象になつた例は、農民運動における給与者同盟や農村外からの転入者、農村者の活動として、また、兼業が家や部落の中へどのような役割の分化を持ちこんでいるか等の問題提起として示されてきたところであり、特にシムボジウム討論の発言の中では、

(1) 組合や農業団体の役員・活動家の職能分化と新しい型の指導者の擡頭(大呑漁村の組合について)中野氏、仙合近郊の蔬菜・花つくりの組合について)竹内氏、乳牛飼育技術の導入を機とする研究グループについて)常盤氏)

(2) 農業町村合併等による部落、村のリーディングの構造変化による役員者やリーディングの性格と役割の変化(区長、議員の役割や出し方の変化)藤野氏、喜多野、福武、黒崎、田野崎氏)

についての発言があり、それがひいてはそれ自体生産関係としての意味をもっている家や村の構造を要質としてあることが予想されます。もっともよくつかに分類される村落支配の原型が家の結びつきとして行われ、リーディングの者に大きな変化は認められないという事実も依然多く認められるでしょうし、その場合旧リーディングを支えている意識と変化に対するその適応性が新リーディングとの対比において改めて問われるべきでしょう。

とにかく兼業や分業や中間化が家や村落の内閣構造を動かす力となりつゝあること、それが政治権力や市場や労働運動との結び付きにおいて村落支配の一つのルートをつくりつゝあること、更にそれが部落や家直令の共同体的規範がある場合には利用しつゝ漸次解体せしめつゝあること、こういつた一連の変化を当日の発言から感じとつたわけですが、この線にそつて本年の共通課題と取りこんで見たいと思つてゐる次第です。